皮膚科

（スタッフ）

部長　　：竹尾　直子
副部長　：生野　知子（2021. 4 月から）
主任医師　：中村　優佑（2021. 3 月まで）
嘱託医　　：轟木　麻子
専攻医　　：三浦　真理子（2021. 4 月から）
　　：角沖　史野（2021. 3 月まで）

（診療実績）

2020 年に当科の外来患者数・入院患者数、手術件数が減少した理由として、2020 年 4 月の部長交代、コロナ禍での受診・紹介控えがあったと考えました。その対策として、外来のかかりやすさを目標に、再診患者の外来待ち時間の短縮を目指して時間枠内の予約患者定数を調整しました。また、完全紹介予約制の原則は継続とし、時間予約の紹介患者枠は 3 枠に固定し、出来るだけ予約時間での診察を目指しました。2021 年はコロナ禍前にはまだ及びませんが、当科の外来患者数、手術件数は増加傾向を認めました（表 1）。

表 1　診療実績の推移

		2019 年	2020 年	2021 年	前年比率
外来	延べ外来患者数（人）	11,116	9,401	10,209	108%
	新外来患者数（人）	1,218	915	1,036	113%
	紹介患者数（人）	510	468	479	102%
入院	延べ入院患者数（人）	3,664	1,895	1938	102%
手術	手術室手術件数（件）	88	30	51	170%

【診療内容】

2021 年の紹介患者・入院患者の疾患内訳をまとめました（表 2、表 3）。当科は、開業医では対応が困難な皮膚科患者の受け皿的な役割を有し、対象疾患は多岐にわたります。慢性特発性蕁麻疹、アトピー性皮膚炎、乾癬に対する生物学的製剤による治療は引き続き行っています。2021 年は新型コロナワクチン関連の皮膚症状を診る機会が多くありました。

入院疾患は、全身症状を伴う蜂窩織炎を中心とした感染症、帯状疱疹が例年と同様に多くみられました。中毒性表皮壊死症（TEN）、恙虫（ツツガムシ）病・日本紅斑熱、マムシ咬傷は救命救急科病棟の入院で対応しました。食物や薬剤による蕁麻疹・アナフィラキシーなどの即時型アレルギーの原因精査の為の皮膚テストは外来ではリスクが高く、救命救急科にご協力頂き、病棟での施行が可能となり、皮膚テスト目的の入院が増加しました。

手術室手術は局所麻酔で行う皮膚悪性腫瘍切除術、全層植皮術を中心に行いました。

表 2　紹介患者の病名内訳　（単位：人）

病名	患者数	病名	患者数
皮膚腫瘍	140	アトピー性皮膚炎	12
湿疹群	71	IgA 血管炎	10
細菌感染	42	膠原病	9
薬疹・中毒疹	41	新型コロナワクチン関連	9
帯状疱疹	34	自己免疫性水疱症	9
蕁麻疹	26	脱毛症	9
アレルギー検査	22	真菌症	8
乾癬	21	白斑症	8
皮膚潰瘍	19	化膿性汗腺炎	6
接触皮膚炎	17	掌蹠膿疱症	6
紅斑症	13	食物アレルギー	5
ウイルス感染	13	その他	0

表 3　入院患者病名内訳　（単位：人）

病名	患者数	病名内訳
細菌感染	50	蜂窩織炎 33、恙虫病 3、日本紅斑熱 2、丹毒 2、ネコ咬傷 2
帯状疱疹	49	汎発性 12
皮膚腫瘍（手術）	29	ボーエン病 8、有棘細胞がん 7、基底細胞がん 4、日光角化症 1
薬疹・中毒疹	15	新型コロナワクチン 1、スティーブンスジョンソン症候群 1、中毒性表皮壊死症 1
湿疹	13	アトピー性皮膚炎 2
アナフィラキシーショック	7	食物 6、新型コロナワクチン 1
検査（アナフィラキシー）	7	薬剤 4、食物 2、染毛剤 1
皮膚潰瘍	6	虚血性 2、熱傷 2、カルシフィラキシス 1
円形脱毛症	5	ステロイドパルス 5
急性蕁麻疹	5	
無汗症	5	ステロイドパルス 5
乾癬	4	
マムシ咬傷	3	
その他	13	

（今後の方向性）

当科は 4 人のスタッフを擁し、検査や手術が可能で、入院病棟を有していることから、県下の皮膚科疾患治療における役割は大きいと考えます。当科は引き続き、役割を果たすための努力を続けていきます。

一方で、当科は女性スタッフが多く、妊娠、出産、育児等により仕事の制限を受けやすい現状があります。そのため、スタッフが働き続けられる環境作りを目指して、チーム内での協力体制を強化していくとともに、個人や科の中の努力だけで対応が困難な場合には、病院内外の理解、協力を得るための働きかけを行っていきます。

（文責：竹尾直子）